

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）
個人研究費
2010年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名	氏名
	観光学部交流文化学科 特任准教授	鈴木伸子 印
研究課題	「接触場面の談話管理に見る文化理解—留学生の自己発話評価と談話分析の結果から」	
研究期間	2010年度	
研究経費	500 千円	

研究の概要（200～300字で記入、図・グラフは使用しないこと）

本研究は、接触場面（日本語母語話者／非母語話者間の会話場面）を活用したビジネス日本語教育実践に基づく談話研究である。分析対象とするのは、来日直後に実施した「留学生による社会人へのインタビュー」という学習活動において収集した接触場面の会話データと、2年後、この活動に参加した留学生が、自らの過去の会話データを聞いて自己評価や訂正を行った際のインタビューデータである。そこから、①実際の会話データに見られる談話スキルの実態と、②彼ら自身の学習開始時の発話に対する自己評価と談話現象に対する理解の間にどのような一致やギャップがあるのかを探る。さらに、談話スキルと知識の獲得を、自律的な学習や文化理解がどう促進するのか、その関連性にも注目する。

キーワード（研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。）

[談話分析] [接触場面] [インタビュー]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

◎ 本研究の研究計画

本研究は、接触場面 (=日本語母語話者 / 非母語話者間の会話場面) を学習に活用した日本語教育実践に基づく談話研究である。分析対象とするのは、ビジネス日本語科目の「留学生による社会人へのインタビュー」という学習活動 (詳細は鈴木 2009 参照) にて収集した会話データと、2年後この活動に参加した留学生に自らの会話データを聞いてもらいながら行うフォローアップインタビューのデータである。これらに対して、談話分析を主とする質的な言語分析を行う。

研究課題は次の通りである。“会話データに見られる留学生の談話スキルの実態” と “過去の発話に対する自己評価や内省に見られた談話管理スキルへの理解” の、2種類のデータにおける異同を検討し、日本語学習の習得において最も難しいと指摘される談話的なスキルや知識を、学習者がどのような経験を手がかりにして獲得するのかを探る。

【参考文献】鈴木伸子 (2009) 「インタビューを活用したビジネス日本語教育の試み」 『立教大学観光学部紀要』第 11 号 pp.140-147 立教大学観光学部

◎ 2010 年度における研究成果

1) データ収集計画とその成果

本研究の研究助成は単年度であり、2010 年度内に行う作業は、必要な言語データのべ 24 回分の収集と、それらに対する一次分析である。本研究は、学年の異なる 3 グループの留学生を対象に、縦断的にデータを収集する点に特徴があり、本年度はグループ B の 2 年後のフォローアップインタビューと、グループ C の会話データ収集と半年後のフォローアップインタビューを行った (※グループ A は 2009 年度までにデータ収集が全て終了)。

まとめると、以下表組の太枠内が 2010 年度内に収集したデータとなる。

「留学生による社会人へのインタビュー」会話データ	半年後のフォローアップインタビュー	2 年後のフォローアップインタビュー
グループ A 2008 年 5 月 : 5 名 (済)	(なし)	2010 年 2 月 : 5 名 (済)
グループ B i 2009 年 5 月 : 8 名 (済)	(なし)	ii 2011 年 2 月 : 8 名 (済)
グループ C iii 2010 年 5 月 : 8 名 (済)	iv 2010 年 12~1 月 : 8 名 (済)	2012 年 2 月 : 8 名 (未)

なお、初回のフォローアップインタビューは当初、会話データ収集直後に行って各対象者の内省を見る予定であったが、学習活動の終了と同時に、各自の会話データを繰り返し聞いて執筆する「内省シート」を提出することとしたため、対象者自身の記述によってインタビューとほぼ同じ内容のデータが収集できた。そこで、フォローアップインタビューは時期をずらし、半年後に実施した。これにより、内省の推移を見るデータが当初の計画より一つ多く収集することができた。

研究成果の概要 (つづき)

2) 一次分析による成果

これまでのところ、おおまかな一次分析をしたに過ぎないが、複数の興味深い点が見られた。以下に、そのうち2点を挙げる。

- ① 談話管理スキルに対する意識化の個人差と、実際の談話展開に見られる特徴
- ② 談話管理における聞き取り能力の影響

①フォローアップインタビューを分析したところ、パイロットスタディにおける分析結果と同様に、対象者は2つのグループに分かれた。すなわち、談話管理スキルに対する意識が強く、根拠を示しながら自己訂正ができる学生グループと、談話管理スキルに対して明確な反応を示さない学生グループである。そこで、彼らが接触場面においてどのように会話への参加を行っているのか調べるべく、実際の会話データを対象に談話分析を行ったところ、両グループの談話展開には話題間の「繋がり」「深さ」という点で違いが生じていることがわかった。

②フォローアップインタビューの分析により、学習者に一定の談話管理スキルがあっても、必要な語彙力および聞き取り能力が備わっていなければ、十分にそのスキルを活用できない場合があるとわかった。このケースは、来日直後で聞き取りに慣れていない留学生の場合にしばしば発生する。事前に練習を繰り返すことで質問は流暢にできるが、同時に、その流暢な質問によって母語話者側は相手方の日本語力を過信して長いターンで発話を続けることがある。その結果、相手発話を十分に聞き取れなくなって理解不足に陥り、意味交渉を放棄して、前後の関連性が薄い「質問-回答」の発話ペアを繰り返すため、談話管理スキルは不使用となる。ここから、談話管理スキルは、文法項目や語彙とは異なり、運用において影響する範囲が広範囲に及ぶため、四技能の総合力に支えられてようやく発揮できるということが確認された。従って、短いターンの連続する会話で談話管理スキルを適切に使えたとしても、長いターンで未習の語彙が登場したり、聞き取りに困難を覚えたりするような場合は、談話管理スキルの運用が困難となることが予想される。

以上、いずれも分析途中での成果であるが、①については既に論文の執筆を開始しており、後述する国際シンポジウムで研究発表を行う予定である。また、本研究が収集したデータは、①待遇性がある点、②学習者が談話管理を行う側に立つ点、③ビジネス場面に準じ情報収集を目的とする点、以上3点の特徴を有しており、留学生と日本人学生の雑談を対象とする接触場面会話研究とは異なるタイプの貴重な会話データである。それらが蓄積されたことには、重要な意義があると考えている。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④ その他 (国際シンポジウムにおける研究発表)

2011年8月、タマサート大学ランシットキャンパス (タイ: バンコク) において開催予定の『日本語教育国際シンポジウム』(仮テーマ「多文化共生社会形成へ向けて: タイ人と日本人の視点から」主催: タマサート大学教養学部日本語学科 後援: 国際交流基金・東芝国際交流財団) で、日本企業内の多文化共生とコミュニケーションのあり方について検討するため、本研究で得られた分析結果とその考察を発表する (仮題「日本企業におけるコミュニケーションの特徴と外国人社員に必要な談話管理スキルについて」)。

具体的には、日本企業内におけるコミュニケーションの特徴と、昨今の外国人人材をめぐる動向を述べた上で、(1) ビジネス日本語会話で有効な談話スキルとは何か、(2) 談話スキルを習得するにはどのような学習が効果的なのか、以上2点について発表する。

今後、以下の論文を発表する予定である。

1) 本研究は、単年度の研究助成であり、本年度内の目標はデータ収集と基礎的な分析であるが、前頁で述べたとおり、収集したデータからは複数の興味深い現象が発見されている。これらについて現在、鋭意執筆を進めており、学術論文として完成し次第、『日本語教育』『社会言語科学』『リテラシーズ』など談話研究を対象領域とする学会誌に投稿する予定である。

2) 上記国際シンポジウムにおける発表内容は、研究論文としてまとめることとなっており、執筆後はタマサート大学東アジア研究所 (Institute of East Asian Studies, Thammasat University) 発行の Japanese Studies Journal に掲載される予定である。

【参考 URL】 http://www.asia.tu.ac.th/journal/trem_japanjournal.htm